

(覚え書き) 横太アイヌの火神の祭壇

北原次郎太

0. はじめに

アイヌの儀礼は祭具の配置や身振りなど細部にわたる規範があり、その体系は地域ごとに若干の差異を孕んだ独自のものとなっている。儀礼を行なう者にとって、これに沿って振舞うことが一つの命題となる。筆者が信仰・儀礼の研究を続ける目的の一つは、儀礼の場で直接教えを受けることが困難な今日において、こうした規範をこれまで蓄積された民族学的な研究成果の中から掘り起こすことである。木幣の研究もその一環であり、同時に最も重要な課題である。

木幣の使用は次のような過程に分けて考えられる。すなわち、①材料の選定・伐採②加工③祭壇への配置・祈願④使用後である。従来の研究では専ら①、②の段階に視点が置かれていたが、同じ型式の木幣が個別の意味を持たされるのは③の段階である。つまり木幣の使用体系の部分が抜け落ちているのであり、現在儀礼を行なおうとする者が最も頭を悩ませるのもこの点である。また、①、②についても比較的入手しやすい資料は胆振・日高西部のものに限定されてしまう。このため筆者は修士論文において木幣研究の基礎的な作業として1930年前後に収集された博物館資料をもとに、樺太・北海道の木幣諸型式を記述した。それとともに、それらの型式が形成される過程について機能と関連付けて考察した。現時点での結論は、木幣は削りかけ、刻印、樹皮、枝、樹種等、個別の意味を担った要素の総体として形作られ、要素の組み合わせは、祈願の対象となる神あるいは儀礼の性質によって決定される。とりわけ樺太においては固定的な「型式」の存在は希薄であり、木幣の格式¹がその場の儀礼に見合うように構成要素を組み合わせる過程で木幣が形作られるというものである。

これを受け、筆者の現在のテーマは祭壇の型式および構成と、背景にある精神性についての考察である。本稿はその中間報告として、火神の祭壇に関してこれまで得た資料を報告するものである。

なお、文献等を引用する際、文中の人名は姓名順のイニシャルに改め、アイヌ語の人名小文字で表記した。旧字は新字に改め、筆者による註は〔 〕内に入れてしめした。本文中、話者以外の敬称は省略した。また、公刊された資料の他に河野広道、更科源藏、知里眞志保のフィールドノートを一部引用している。河野のノートは1982年に青柳信克が編集出版されたものを用い、その他は原文の改行部を「/」で示した。更科のノートには更科自身が、知里的ノートには遺稿整理委員会がNo.を付している。引用する時はそのNo.を添えて〔更科ノート 8〕、〔知里ノート 214〕のように示した。

謝辞

本稿に掲載した資料写真の一部は、2001年12月に千葉大学に提出した修士論文「樺太アイヌの木

¹ または「等級」と言い換えられるだろうか。格の高いものほど神に喜ばれ、一般に大きく複雑な形になる程「格が高い」とされる。格が低すぎても、高すぎても、祈願をした者にとってよくない結果を招くという。

幣における格と構成要素の関係一名取武光・更科源蔵コレクションを中心に一」執筆のために博物館に趣いて撮影したものである。北海道開拓記念館の出利葉浩司氏、並びに北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション植物園の市川秀雄氏、加藤克氏には、転載のお許しをいただいたほか、調査の段階から色々な面で便宜をはかっていただいた。また、弟子屈町立図書館では館長の山口武司氏のご厚意により整理段階の資料を多数閲覧させていただいた。一部にロシアの博物館資料の図を掲載しているが、これは千葉大学教授荻原眞子氏を中心に 1995~2001 年度に行なわれたロシア・アイヌ資料調査プロジェクトの成果に基いている。その他にも多くの方々のご協力をいただいた。ここに記して心からの感謝を申し上げたい。

1. 先行研究

1-1. 用語の再検討

木幣はアイヌ語の *inaw* に対する訳語として用いられている。*inaw* と呼ばれるもののが木を削って作られた御幣状のものであることからこう呼ばれている。しかし、*inaw* は木幣の機能に対して与えられる名称であり、木幣の型式を問わず *inaw* と呼ぶ。そればかりか、笹束や松の枝、木から剥いだ樹皮を棒に縛り付けたもの、綿糸を撚って作った呪い用の首飾りなど木幣以外の物を指す事もある。逆に木幣であっても機能の面から *senisteh*「お守り」などの名称が与えられていることが少なくない。そのため筆者はあえて *inaw* ではなく木幣を用いている。

現在、木幣は *kikecinoyeinaw*「削りかけを撚った木幣」、*kikaparseinaw*「削りかけがフサフサした木幣」、*cehorkakep*「逆さ削りの木幣」、*sutuinaw*「棒状の木幣」、*hasinaw*「小枝を持つ木幣」、*inawkike/inawru*「削りかけ」、*cisekorkamuy*「家の守護神の木幣」などに分けて説明するのが一般的である。これはアイヌ語名称や、木幣使用に関するアイヌ自身の意識を反映した分類である。現在、アイヌ文化を説明する際に、「*kamuy*」や「*nispa*」、或いは漁具である「*marek*」など、現代の日本文化内において説明しにくい概念や適当な訳語がつけてにくいものにはあえて日本語を宛てず、アイヌ語をそのまま定着させようとする動きがある。そしてそれはある程度定着してきているし、先の木幣の例にしても、実際これは胆振・日高西部のものに限って説明するには大変すっきりした分類である。これはこの地方における研究の蓄積がなってきたことの成果と言えるかもしれない。ただ、整理の過程で多くのものを切り捨てて単純化されたものであるという感は否めないし、他地方の研究があまり進展を見ないために、アイヌ文化全体に一般化されやすい危険を孕んでいるといえる²。また、もう一つ大きな問題はこれらの名称・分類が胆振・日高西部を一步出ると途端に通用しなくなるということである。例えば *cehorkakep*「我々がその頭を逆さに削った木幣」は、他の木幣と違い上から下に向かって削っている（以後、↓で表す）という特徴に着目した名称である。ところが、日高の様似以東にはこれと良く似た使われ方をする木幣で↓に削ったものと、下から上に向かって削った

²もちろん概説書の説明には地域差について触れた部分が無いではないが、多くはそれ以前に書かれたものをなぞっているのみであり、状況の改善にはつながっていない。

もの（以後↑で表す）がペアで存在する。↑に削ったものは当然ながら *cehorkakep* とは呼べない。また、この *cehorkakep* に似た木幣をほとんどの地域では *situinaw* と呼ぶが、胆振・日高西部で *situinaw* とは全体に樹皮を残した棒状の木幣をいう。この他にもアイヌ語名称は地域差が大きく、複数の地域を対象とした議論の際には混乱を招くおそれがある。

一方、上記の分類とは一致しないものの各地域内における分類は大きく 4~5 種になる。一見するとかなりバラバラな形態をしたもののが一つの枠内に分類されているように思うが、それらに共通しているのは削り掛けの長さや有無である。例えば千歳の例では *cehorkakep* の内、祖先供養に用いるものは他のものより頭部と脚部を長く作るが、やはり *cehorkakep* と呼ばれる。また、日高の様似以東から釧路・美幌にかけての北東部一帯の *situinaw* は削りかけの方向で 2 種に作り分けるが、やはり *situinaw* であることには変わりない [青柳 1982: 150]。また、旭川の *situinaw* も屋内で用いる 20cm 程のものから、屋外に立てる 1m 以上のものまでを含む。つまり削りかけの長さにより大まかな分類がなされ、木幣自体の長さや削りかけの方向等による違いはより下位の分類になっているといえる。そこで筆者はこの基準にたった日本語名称を用いることとし、削りかけの長いもの (*kikeparse*) を「長幣」、長い削りかけを撫ったもの (*kikecinoye*、*riinaw*、*cikeinaw* 等) を特に「長撫幣」、削りかけを編んだもの (*sinoinaw* 等) を「長編幣」、削りかけの短いもの (*cehorkakep*、*sutuinaw* 等) を「短幣」、樹皮を剥かず数箇所羽毛のような形に削り起したものを「棒幣」と呼ぶことにしている。削りかけだけを本体から剥ぎ取ったもの (*inawkike*、*cimespainaw* 等) は「剥幣」と呼ぶ。また、木幣の下端を *inawkema* 「木幣の足」などと呼ぶ別の木材に縛る・挿し込むなどし、木幣の高さを増すことがある。これを幣脚と呼ぶ。

一般に祭壇というと家屋の背後にある木幣の一群が想起されると思われる。この全体を指して *nusasan* 「木幣の棚」と呼ぶために、*nusa*=複数の木幣が立てられた所と考えられてきた。が、全体で 1 つの様に見える木幣群は、実は小さな祭壇の集合体である。現在の白老、二風谷では大きな祭壇を作りほぼ全ての神をここで祭るが、それは木幣の支えとなる柵の部分が 1 つにまとめられているにすぎず、その中の個々の神に対して捧げられた木幣は独立した存在である。また、個々の神に対して 1 つづつ柵を設ける例も少なくない。いずれの場合においても、各神への木幣を立てた場所それぞれが「～*nusa*」と個別の名で呼ばれる。また、後述するように屋内の炉に木幣を立てた場所にも *inawsan*、*nusa*、*cipa* という祭壇を表す語が用いられている。また、屋外の祭壇に木幣を立てるとき 1 神に対し複数の木幣を組み合わせて捧げるのが「本式」とする説明がある。これも、木幣が複数あることが祭壇の前提とされた一因かもしれない。しかし、胆振・日高西部においても 1 神に 1 本だけを捧げる例があるばかりか、釧路から美幌にかけては屋外の祭壇においてはそうした木幣を組み合わせる現象自体が見られない。この地方では 1 神の祭壇に立てられる木幣は常に 1 本である³。また十勝や石狩川流域でも組み合わせの例は見られるものの、頻度はかなり低い。従って本稿では屋内・屋外や木

³ ただし、いずれも資料が少ないので、引き続き調査を要する。また、熊の頭骨を安置した股木や、本稿で扱う火神の祭壇については複数の木幣を組み合わせる型式が見られる。

幣の数を祭壇の要件とせず、木幣を立てて或いは吊るして祈願をする場所を祭壇とする⁴。

本稿の主要なテーマは木幣を組み合わせて使用した場合の木幣同士の関係である。これらは後述するように主導的に働くものと、補佐的なものとに分かれるのだが、従来はこれを「主神」「従神」と呼んでいた。木幣の機能には大別して①祈願の対象となる神への伝令者、②その神への贈与物、③木幣の靈魂が強い力を持ち、守護神として働くの3つがあげられる。③の場合には、cisekorkamuy「家の守護神」や newsarkamuy「(熊の) 話し相手になる神」というように木幣自体を「神」と呼ぶ。しかし、一般に「フクロウ神の木幣」などと言う時には、木幣の中にフクロウの神が宿っているとは考えない。この場合はフクロウ神に捧げられる木幣と解釈する方が普通である。従って「主神の木幣」「隨神／従神の木幣」という名称からは、これらの木幣が火神とその配下の神との、それぞれの許へ趣くかのような印象を受ける。火神が多くの従神を持つといわれるの事実だが、この場合はそれぞれの許へ木幣が送られるということではない。後述するように、これらの木幣は一様に火神へ捧げられたものである。アイヌ民族博物館の『伝承事業報告書 ポロチセの建築儀礼』⁵では、これにかわり「主幣」・「副幣」という語を用いている[アイヌ民族博物館 2000]。上記のような混同を避けるため、本稿でもこれに従うこととする。

1-2. 火神の祭壇の先行研究

アイヌが最も敬愛した火神への儀礼は、日常の儀礼から大規模なものまで様々あり、また各地域ごとに独自の特徴を持っている。樺太アイヌの住居は戸口に立って左側が上座であり、一番奥の壁付近が儀礼に関わる神聖な個所とされた。居室の中央には炉が作られ、屋内の生活は炉を取り囲むようにして営まれた。家長は左座の奥よりに座し、儀礼の際はここから火神に祈りをあげる。家長の座近く、炉の左奥隅の灰には火神に捧げる木幣が立てられる。

B. ピウスツキ、葛西猛千代らが調査した 1890 年代～1900 年代初頭の樺太アイヌ集落ではこのような生活が営まれていた。1930 年代の山本祐弘・知里真志保らの調査時には住居はロシア風・日本風のものに変わり、囲炉裏の中にはストーブが据えられた。しかし、山本らの残した写真・スケッチや博物館資料によれば木幣の型式や用い方はあまり変化していないことが窺える。図 5 は終戦直後の東海岸白浜で撮影された火神の祭壇である。五徳の脇に 3 本の短幣が立てられている。

一般に、炉に立てて火神に捧げるのは白浜 b・c(図 1)のような短幣であり、樺太では東西両海岸でよく似たものを作る。真直ぐな棒の上部半分程に短い削りかけをびっしりと削り出す。軸の全周を螺旋を描くように切れ目なく削っていくため、削りかけが非常に密集して粟の穂のような外観を呈する。

⁴ しかし、日常生活においては木幣を伴わない礼拝や供犠も存在する。これらを行なう場所を祭壇とするか単に祭場とするかはもう少し検討したい。

⁵ アイヌ民族博物館は 1997 年に焼失した復元家屋の再建に際して新築に伴う儀礼を挙行し、再建から儀礼までの全行程を記録した。同館は準備段階から北海学園大学教授藤村久和氏を招いてミーティングを行い、儀礼に関しては近年における最も活発な議論が展開された。本書は家屋の再建、儀礼に関する記録の刊行を目的としたものだが、随所に議論の成果が反映されている。

胴体正面を上から下へ向かって平らに削り、竹の子型の面を作り出す。この部分を kotoro「面（めん）」という。またこの面をはさむ上下、或いは面の上に itohpa「刻印」を刻む。北海道でも短幣・長幣に刻印を刻むが、胴には刻印を刻まず、専ら頭部に刻む。一方樺太では刻印を頭部に刻印を刻む例は鶴城（北 10764）、登富津（北 34652）、智来⁶（北 34658）、多蘭泊（北 34653、北 34654）など西海岸に見られ、東海岸にはない。胴体の両側面には縦一列に短い削りかけを立てる。

2. 特殊な資料の存在

一方で、山本らと同時期に調査を行なった考古学者の名取武光・馬場脩らの資料中には白浜 a(図 1) や多蘭泊 b(図 2)、新問 c(図 3)、新問 d(図 4) のような見慣れない形状の木幣が存在する。火神の祭壇を考察するにあたり、まずこの特殊な木幣を解釈することが必要である。

2-1. 形態について

北海道の木幣を見慣れた目には白浜 b・c などもかなり異色のものに映るが、白浜 a、多蘭泊 b などは更に奇異な印象を与える。これらを観察すると頭部付近は図 1b・c に似ており、樹皮のついた部分は幣脚に似ていることが分かる（図 6 参照）。さらに新問 c・d は胴体から横に伸びた枝の部分も頭部と同じような形に削ってある（図 4）。図 6 に見るよう樺太の幣脚には 1、2 本の横枝がつき、それぞれに木幣が連結されるということが珍しくない⁷。新問 c・d はそれと同じ構造を持ち、一木で作り出したいわばミニチュアのようなものだと見ることが出来る。また白浜 a、多蘭泊 b のように横枝の先端を斜めに切り落としただけの場合もあるが、ここに剥幣を縛り付けた資料もある（図 7 参照）。

上で見たようにこれらは短幣と幣脚に相当する部分からなり、一体として作り出されてはいるものの概念上は 2 つをつなぎ合わせたものであると考えられる。この推測を可能とするためには、木幣の表現法として 2 つ以上の部品による一体成形が認められなければならない。現在、それを直接証明できるような証言・記述等は手元にないが、いくつか傍証となるものを得た。その一例を図 9・10 に挙げた。これらはいずれも B. ピウスツキが収集し、現在はロシアのサンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（以後 MAE）に収蔵されている。No.829-448 は台帳の記載によれば「Ундзі-инай（火-木幣）」とされ、新問 c と良く似た形状に作られている。頭部付近に短い削りかけが密集し、左右に伸びた枝の先も頭部と同じように削りかけがつけられている。No.829-455a, b は火神の木幣ではなく「Хох инай（陰嚢-木幣）」と記載されている。一見すると No.829-448 に似た形状だが、こちらは短幣と幣脚を別個に作り、前者を後者に挿し込む形で連結されている。No.829-448 が No.829-455 と同じ構成であり、なおかつ一体で作られていることがよくわかる。

⁶ ただしこの木幣を製作した K・Y 氏は亜庭湾西部鈴谷の家系。

⁷ これに対し北海道の幣脚は枝を全て払った真直ぐな棒で、木幣が一本だけ連結することが多い。ただし、余市[名取 1959: 96]や八雲[青柳 1982: 210]など一部で幣脚に 2~3 本の木幣を連結した例が見られる。

このような現象が起きるのは、幣脚が単なる附属品ではなく、木幣の胴の延長として意識されていたことによると考えられる。名取は木幣が幣脚に接続する場合は、木幣の胴ではなく幣脚に刻印を刻むとしている⁸(図8参照)が、木幣に刻むべき刻印をなぜ幣脚に刻むことが出来るかといえば、それは幣脚が木幣の一部であるからにはかならない。

こうした一体成形の例は北海道の一部にも見られる。八雲・美幌などでは長幣の下部を長く残し、幣脚のように作る例がある。これを八雲では *yaynicikor*、美幌では *yaynikorinaw* と呼ぶという⁹。

yaynicikor は *yay-nici-kor* 「自分の／に・～の柄・～を持つ」に分解できるように見える。*kor* は目的語を 2 つとる他動詞である。*yay*、*nici* が目的語となり、*nit* の所属形である *nici* がもう一つ目的語を要求するため、全体として自動詞となる。アイヌ語の自動詞は名詞となることができるので、それが名詞化しているように見える。しかし、佐藤知己氏によると他動詞は名詞の所属形を抱合しない [佐藤 1992 : 198]¹⁰ため、この分析は成り立たない。

一つの可能性として *nit* の語末の *t* が、直前の母音 *i* のために口蓋化を起こし、河野の耳に *nici* に近く聞こえたのではないか¹¹。元の語形が *yaynitkor* だとすると、*yaynit* 「自分の柄」を *kor* が抱合して自動詞となり、名詞化した語だと考えられる。

また、河野は美幌で次のような例を記録している。

《1》美幌 K·G 氏(男性)の事例(1951.10.8-10)

《ヤイニコルイナウ》

yainikorinau はイナウそのものの足が長く、*inaushpe* のないもの。イナウの先を尖らせて直接土に立てる。*nusaikkeu* のないところにイナウを 1 本だけ立てる時, たとえば水の神には多くこれを使う [青柳編 1982 : 111]。

「*inaushpe*」は幣脚、「*nusaikkeu*」は木幣を立てかけて固定するための支えをいう。*yaynikor* という語形はそのまま *yay-ni-kor* 「自分の・木・～を持つ」と解釈できる。また、知里の同日のフィールドノートには次のように書かれている。

《2》美幌 K·G 氏(男性)の事例 (1951.10.8-10)

yainitkor inau / 足長くしたイナウ / *inauushpe* の代りに / 水の神様に使う、*nusaikkeu* もない時に使う [知里ノート 214 : 77]

このように知里の記録では *yaynitkor* という語形であり、*yay-nit-kor* 「自分の・柄・～を持つ」と解釈できる。ここでは、一体成形の理由について、木幣の支えが無いためだと述べている。一度立てた

⁸ [名取 1959 : 15]

⁹ [青柳編 1982 : 210]

¹⁰ この論文は千葉大学教授中川裕氏から紹介していただいた。

¹¹ 以上の分析は中川裕氏の教示によった。

木幣が倒れるということは、何らかの理由で人間の祈りを神が拒絶したか、何かよくない出来事を神が人間に知らせようとしているのだといい、いずれにせよ凶兆であるとされる。そのため、木幣を立てる際には簡単に倒れないように配慮がなされる。住居裏の祭壇には低めの鉄棒のような支えを設けてそこに木幣を縛り付けているが、水汲み場などの1神だけを祭る祭壇にまでいちいち支えを作ることはできない。そこで、倒れにくいように低めの木幣を立てたのではないか¹²。低い、つまり材木が短くて済むのであれば、一体として作り出すことはそれほど困難ではない。また、接合したものはやがて結束材がゆるむことも考えられるが、一体で作ればその心配もない。

また、河野によると屈斜路では「satinau(ekasiinau)」という木幣を作り、先祖の内で位の高い者に捧げる。図をみると下部を長く作った長幣で、下部の樹皮を残したところを「chikiri」と呼ぶという¹³。cikiriは道東部で人間の足をさす cikir の所属形である¹⁴。この例も幣脚と長幣が一体成形されていると解釈できるのではないか。

2・2. 意味上の解釈

次にこの木幣はどのような状況で使用されたのだろうか。人類学者の石田収蔵の野帖には形状の異なる短幣3本がセットで立てられている様子が描かれている(図11)。また、名取は新問a・b・cの解説で、これらが一組で用いられるとしている[名取 1959:6]。その他の地域の資料については特に言及していないが、資料の提示の仕方から新問の例と同様に考えていたと思われ、これらが組み合わせて用いられることは間違いないようである。しかし形状が違う理由等については何も触れていない。ただ新問の海神の木幣(図12)の解説で、中央の枝のあるもの(北34641)を「主神」とし、左右の枝の無いものを「隨神」としている。この言葉の具体的なニュアンスも示されていないが、[山本 1943]や[金田一・杉山 1942]から「主神」「隨神」の例を引用している。どちらも家神の木幣の例であり、中央に大きな「主神」の木幣が立ち、その両側に「隨神」にあたる木幣が「はべる」と表現している。これは樺太及び北海道西南部の屋外の祭壇に見られる、主幣・副幣の組み合わせと共通する説明である。おそらく名取は火神の祭壇にもこのイメージを重ねていたと思われる。

また、藤村久和らの『民族調査報告書 資料編I』にも木幣相互の関係についての説明が見られる[藤村ほか 1973]。本書は樺太出身者からの聴取を編者が要約する形でまとめられている。例えば樺太東海岸小田寒出身の男性からの聞き取りには次のような一文がある。

《1》小田寒 H・T 氏(男性)の事例 (1972.8.23・24)

火の神に捧げるイナウをウンチイナウ(unci-inaw=火(の神へ)の一木幣)とかウンチナウ(uncinaw→unci-inaw)とかいう。これはたいてい主神へ1本、従神へ2本、合計3本1組

¹² 鶴川では浜辺など風の強い所に立てる木幣は低めに作って立てる[更科ノート8:100]。

¹³ [青柳編 1982:128]

¹⁴ 胆振・日高で幣脚を指すときはkemaが用いられる。

になるものである。2本だけ作って捧げるときがあるが、その理由や意味は全く知らない。【中略】主神と従神は、室内の戸口に立って炉の左隅からシモンソ〈simon-so=（神窓からみて）右手の・座=横座〉の炉ぶちにそって立てられる。炉ぶちの隅にはシラカンバかオンコ（従神）、その下手がカワヤナギ（主神）、その下にハンノキかエゾマツ（従神）のイナウが立つ。【藤村ほか 1973：25】

このように本書中で藤村は一貫して「主神」と「従神」という言葉を使っている。引用個所には【名取 1959】から引用した図（図 1 と同一資料）が掲載されているが、本文を読む限りは 3 本とも白浜 b・c のような形をしており主幣を他より大きく作るだけのように受け取れる。3 本の木幣の配置については主幣を中心に配されることが述べられている。また、「主神」「従神」については、次のように述べられている。

《2》小田寒 H・T 氏(男性)の事例（1972.8.23・24）

木幣のことを全てイナウ〈inaw〉という。しかし、用途別に作られると名称がかわる。たとえば、家を作ったとき、家の守り神となる木幣はヌサ〈nusa=日本語の幣、ただし樺太では主神をいう〉というし、他のヌサにつく男女一対の従神をケマ〈kema=脚〉という。小田寒では、主神に向かって右に男神、左に女神を添える。ヌサにもいろいろな作り方があるから口だけではいい表せない。【藤村ほか 1973：20】

この説明は火神の祭壇に限ったものではないが、藤村は火神の祭壇についてもこの説明を適用していると思われる。また、副幣が男女一対であることが述べられている。以上をまとめると小田寒の木幣は主幣 1 本、副幣が男女 1 本ずつの 3 本一組で作られる。これは火神の木幣にもあてはまる。これらは、右座寄りの炉ぶちに沿って立てられ、主幣が中心に立つように配される。また、2 本だけ作って立てられることもあり、この場合、主幣・従幣の対立があるかは不明。

副幣の呼称は H・T 氏のように kema とする記録が多いが、西海岸来知志から移住した F・H 氏（女性）はこれを kuwahanimani¹⁵「杖になる木？」、または単に kuwa¹⁶「杖」と呼ぶ。また、来知志よりやや北の鶴城から移住し、F・H 氏とともに伝承記録活動に参加していた Y・S 氏も kuwa という木幣を製作している（図 13a・b）。常呂 b は女性の短幣であり、従って常呂 a は男性であると思われる。性別は後述する北海道東北部のように、削りかけの方向で表現されている。また類似の資料を配した祭壇の映像記録がある（図 14）。資料の細かな検討は別稿に譲ることとし、ここでは従神を kuwa と呼ぶこと、それらが図 14 のように配されることを確認しておきたい。

ところで副幣の持つ意味については名取も藤村も述べていないが、およそ次に引用する説明と同義であると思われる。以下は 1998 年にアイヌ民族博物館が主催した公開シンポジウム「アイヌのすまいチセを考える」での藤村の説明である。

¹⁵ 【藤村ほか 1973：12】

¹⁶ 【更科ノート 17：123】

「キケチノイエイナウやキケパラセイナウを主神としますとストウイナウやハシナウは主神の脇に付きます。これらは地域によって組み合わせが違います。ちょうど外国の大祭(キケチノイエイナウ、またはキケパラセイナウ)が来ますと両方にボディーガード(ストウイナウやハシナウ)がついて、先導する警官(チエホロカケブイナウ)があるというふうに思えばいいんですね。チエホロカケブイナウが露払いという形で前にあってストウイナウやハシナウが脇を固めて、その間に主神がある。これらがセットになって、例えばシリコロカムイ(大地の神)ならその神のもとへ行くことになります。」[アイヌ民族博物館 1998: 133]

文中のキケチノイエイナウ・キケパラセイナウは長幣、ストウイナウは棒幣、ハシナウは枝幣、チエホロカケブイナウは短幣である。組み合わさせられた「主神」とその他の木幣は一団となって神のもとへ赴くと説明されている。さらにその少し後で「権太の方も、イナウの形は違いますが、セットであるというのは間違いない。それが一番いい形とされます。」と述べている[アイヌ民族博物館 1998: 134]。また、同年に執筆された『日本民俗宗教辞典』の「アイヌの祭」の項では、「主神」を「主要な神への使者」とし、他の木幣は「先導」「警護と補佐役」とした他は先と同様の説明を行っている[池上ほか 1998: 4]。

本稿では[藤村ほか 1973]に用いられている「主神」、「従神」という表現もその後の藤村氏自身の説明と同じ文脈で用いられていると仮定しておく。

また、西南部では熊送りの際、熊の頭骨を安置した股木をひときわ高く立て、その両側に計4~5本の木幣を立てる。ちょうど股木が主幣で、左右に立てたものが副幣のようになる。これを熊(主幣)の杖または手足だといい[名取 1941: 56]、あるいは熊に送られた土産を代わりに背負って行くのだともいう[名取 1941: 74]。権太で副幣をkema、kuwaと呼ぶことも、これと同じ発想によっている思われる。

3. 北海道アイヌの事例

2章では、権太の火神の祭壇について、その構成と解釈について述べた。この章では参考として北海道の事例をいくつか挙げてみようと思う。

3-1. 北海道東北部

ここでいう東北部とは日高の様似以東、釧路から屈斜路、美幌にかけてである。様似は地理的に見れば日高の沿岸部だが、木幣の特徴から東部に含めた。

《1》帶広伏古 H・T 氏(男性)の熊送りの記録

H家ではアベウチイナウに二つの種類を作る。第三図の1[図15]を見る如く長さ5糧、太さ直徑において二・五糧位の柳の棒で、下半部は四筋細長く縦に樹皮を剥ぎ、上半部はシユトイナウと同様に三段に各々對生に削掛を作り、上端には両側から力を入れて斜に切り口(パロ)を

作る。他のもう一種は長さ二十粁、直径一粁位の棒で上半部には前者と同様に削掛を立て又パロを作り下半部からは全部樹皮を剥ぎ取る。アベウチナウは第四図の様に炉の神窓寄りの主人座の前に1・2の位置にまとめて立てる。このアベウチナウは祈りのすんだ後に焼く。このイナウは伏古村ではアイヌの家系でイトクパの違っている家では形の異なるイナウを作る。【犬飼・名取 1939 : 257-258】

《2》音更 T・M 氏(男性)の事例 (1953.7.9)

kike は 6ヶ所 2ヶ所づつ／向ひ合ってつける／長さ一尺位／片方男、片方女ということになって／いるが【更科ノート 8 : 122】

ここで図示されているのは、↓に削った短幣である。《1》の木幣も全て↓に削られている。これに対し十勝をはさむ日高東部や釧路地方では短幣の削り方で性別を表現する。

《3》虹別での熊送りの記録 (祭司は屈斜路 T・K 氏(男性)) (1939.12.16)

火の神に用ひるイナウ即ちアベシユトナウ【短幣】は、四本用ひ、其の中の一本は大きさもアシユルベイナウと同じ位[20cm]で、他の三本はサネゴロシユトイナウ[10cm]より稍大形に造る。

削り花の立て方はサネゴロシユトイナウと同様【上から下】である。【犬飼・名取 1941 : 101・106】短幣のうち大きい方を炉の隅に、小さい方を炉の中心に立てる。2日目にも新しい短幣を立てる(1日目に立てたものは燃やしたと思われる)。

《4》春採での熊送りの記録

アベウチカムイ(火の神)のイナウは、長さ十五センチメートル、直径〇・五センチぐらいで、頭部に多数のキケ(削屑)のついた小形のもの四本と、大形のもの一本との五本を造る。大形の方は熊送りの時に、炉の上座の右隅に立てて祭り、小形の方は神祈りの終りには焼くのである。【佐藤 1958 : 35】

《5》釧路(春採?)¹⁷での熊送りの記録

いよいよアベウチカムイ・ノミ(火神への祈り)が始まる段になると、エカシ(長老)達は、各家柄により、格式に従って着座する。先づ熊の飼主は、アベウチカムイ・ノミ・クル(火の神に祈る人)として、アベウチ・エカシ(火の神の老爺)とアベウチ・フチ(火の神の老婆)の小さいシユトイナウ各二本づつ四本を炉の燃え盛る火の近くに寄せて並べ立て、別に一本の

¹⁷ 佐藤が言う「釧路アイヌ」とは釧路川流域のアイヌ全体を指す。春採の他、巻末に挙げられているのはタッコブ、トーロ(塘路)、クマウシ、ニジベツ(虹別)、白糠、シタカラ(舌辛)、テシベツ(徹別)、アキベツ、アカン(阿寒)湖畔である。ここに挙げた事例は、前後の記述が先述の名取・犬飼による虹別の記述と似ている。名取らが見学した熊送りには佐藤も同席している。

大きい方を、ロレンガラエと、シソの交叉点の炉の中に立てる。ここは前から沢山のイナウが束ねたように、かたまって立っている。それは、アベウチカムイイナウ(火の神)ともいって、酒を造る度毎にアベウチカムイを祭って神酒を献するために立てるものである。であるから一名トノトカライナウ(酒造りの木幣)、サケカライナウとも言っている。[佐藤 1958: 45-46] ここでは小さい短幣の内訳を男女 2 本づつとしている。性別の表現法については触れられていない。

《6》白糠 N・K 氏(男性)の事例 (1963.2.1)

inau は ponsito inau 6 本(1 本は大きく) つくり、5 本の火の周りに立て、/inonno 終わったらこれは火にくべ、少し大きいのは炉の隅に立てておく、/これが集ったのは abe huchi ekasi が腰かけて休む、huchi はかけない、ekasi から先に nomi する。[更科ノート 18: 74]
河野ノートの 1931 年に書かれた図によれば、N・K 氏の短幣は↑が男性、↓が女性となる [青柳 1982: 183]。

《7》塘路 T・T 氏(男性)の事例 (1953.9.5)

炉の隅には abeso sikkama kamui inau が昔あった。/マタギに行くとき立てていき、狩が終ると nusa にもって行き、/兎の頭でも狐の頭でも一緒に送る。頭をおくるに草の芽の出る前/やらないと生れ変りがおそい、/この inau のかはりに bekanbekamu inomi のとき私の家では 1 本加へて/5 本立てた。/男女二本づつと abeso sikkamakamui/の inau と五本たてたが/普通の人は四本だけだ、[更科ノート 8: 182]

これによれば、平素の儀礼では炉に男女の短幣が 2 本づつ立てられる。また、出獵に際して立てた短幣は炉で焼かず、獲物の頭部を送るのに用いたとしている。菱の実を採取する前の大きな儀礼の際、話者の家では普段の組み合わせに短幣を 1 本加えて 5 本立てるという。他家ではそうしないということは、例えばその家の当主が儀礼の祭司かどうかなどに関わるのかも知れない。ノートの図によると男性の短幣は pinne situ nau とし、↓ に削られている。女性の短幣は machine situ nau とし、↑ に削られている。

《8》塘路 菱の実祭りの事例

酋長はまずアベウチカムイ(火の神)の小さなイナウを五本のうち一本は炉の隅に立て、他の男女一対ずつのイナウは火に近い灰の中に立てて、[中略] この酋長のイノンノイタック[祈り言葉]中に、炉の中に立てたイナウに火が移って勢よく燃え上がって火の方に倒れるのを見て、お祭りが立派に行われ、ベカンベ[菱の実]の収穫も充分に満たして下さる前兆として喜ばれます。[佐藤 1961: 212-213]

ここでも《7》と同じ組み合わせの短幣が用いられ、立て方も他地方と同様で、小さな短幣は祈りの間に燃えるように配置されている。

《9》様似岡田 H・S 氏(男性)の事例 (1951.7.26)

1, shutinau (40cm) susu ヤナギで作る。／2, machineshutinau (26cm) ／3, pinneshutinau (26cm) ／pinneshutinau, machineshutinau は昨年家を建てた時, chikubeni エンジュでつくったイナウである。[青柳 1982 : 150]

pinne と machine は《7》と同様に男女を表し、削りかけの方向も男性が↓、女性が↑である。大きな短幣が 1 本と、小さい短幣 3 本（女性 1、男性 2）の組み合わせである。

《10》阿寒 A・H 氏(男性)の事例 (1956.4.25)

○占いする木幣 (tusu inau) ／病気のときに一番先に inonno inau に inonno／をし、次に abe syutu ekasi と abe syutu huci／に inonno をし、tusu inau に inonno を／をし、障りがあつた沸ってくれとたのむ、これは tusu を／する婆さんとは関係なしにやるものだ。／いつでも立てておいて rappu がすっかりおちてしまったら／かわりをつくって古いのは nusa に納める。／これは阿寒だけでやり、釧路では見たことがない。[更科ノート 11 : 2-3]

ここでいう tusuinau はおそらく占いのために特別に立てるものであつて、火神の祭壇には含められていないと思われる。また、inonnoinau「祈り・木幣」が主幣、abesytuhuci「火・棒・お婆さん」・abesytuekasi「火・棒・お爺さん」が副幣にあたるように見えるが、はつきりしない。ノートに描かれた室内の見取り図によれば、inonnoinau は炉の四辺の内、横座よりの一辺の中央に立てている。男女の短幣はその左、戸口から見て左奥隅に立てる。tusu inau¹⁸ (nupuru ianu) は同じく右座寄りの下手隅に立てられている。また、abe syutu huci の別名を usaruhuci としている。

《11》美幌 K・G 氏(男性)の事例 (1951)¹⁹

apesituinau 3 ツ／・昔ハ apesituinau san アッタ／rorun sikkeu／kamuinomi スルタビニ一つ立つ、主人／生キテイル間ハチョセヌ、主人死時 nusa サ／持ッテ行ッテ iwakte —nusa サヤル、／昔ハ／主人死ネバ家ヤイテ転居シタカラ inausan ハ使ハヌ ○シソノママ／残ッテイル

[中略] apeuchi nomi／酒コサエタ時ハ必ズスル、誰モヨバヌ／入ッテ来テモ／何モコサエヌ、／ape situ inau つくる 3 本、♂2、♀1／♂1ツ♀1ツ焼イテ一番太イ♂はのこしておく。／炉の中の沖よせておいて根ガ焼ケルト自然／に倒レテ焼ケルヨーニシテオイテ nomi／している。

¹⁸ なお、この占い木幣は幣冠を被った短幣だという。形状と収集地から推測して、北海道開拓記念館収蔵の 89538-1, -2 がこれにあたると思われる。同資料の写真が[更科 1968]の p117 に掲載されている。

¹⁹ この時期の知里は河野広道・更科源藏他数人と共同で調査することが多かった。この日の調査に河野も同席していたらしく、河野のノートにもほぼ同じ内容の記載が見られる¹⁹。これによれば調査年月日は 1951 年 10 月 8~10 日となっている。

一番太イノダケハ陸ニオク。[知里ノート 214 : 78-79]

男性の短幣 2 本と女性の短幣 1 本を作る。男女 1 本ずつを火に近い場所に立て、祈願している間に燃えるようにする。残った男性の短幣 1 本を *apesituinausau* に立て、それは家長が存命中はそのままにしておくという。燃やしてしまう方が副幣、残される方が主幣であると思われる。

《12》美幌 K・G 氏(男性)の事例 (1951.1.12)

4) 《アペフチイナウ》

apehuchiinau は 3 本作って炉に立てる。これ焼いて、その倒れ方で占う。*inonnoitak* をして予言した方に倒れると、祈りが聞き届けられたことになる。[青柳 1982 : 54]

《13》美幌 K・H 氏(女性)の事例 (1970.8.25)

火の神をアペウチカムイ 〈ape-uci→huci-kamuy=火の・媼・神〉とかアペウチ 〈ape-uci→huci=火の・媼〉といい、何か祝い事があるとき小さなイナウを 1 本作り、座敷の入口に立って炉の左上隅に立てイナウの頭にシラリ 〈sirari=酒粕〉を少量のせてやる。エカシ 〈ekasi=長老・祖父〉たちが祈りをささげたあと、このイナウを火のそばに移動して立てる。しばらくすると火の勢いで、イナウがだんだんこげてくる。そうなるとこのイナウを火にくべて燃やしてしまう。アペウチカムイへささげるイナウはこの儀礼以外につくることはない。[藤村ほか 1974 : 45]

《14》美幌野崎 K・Y 氏(女性)の事例 (1971.8.11)

炉の左上隅(座敷の入口に立って)にはアペフチカムイ 〈ape-hudi-kamuy=火の・媼・神〉に捧げるアペフチイナウ 〈ape-huci-inaw=火の・媼(神)への・木幣〉、ついでにはアペフチシユト・イナウ 〈ape-huci-sutu-inaw=火の・媼(神)への・棒状・木幣〉といわれるスヌ 〈susu=ヤナギの総称〉製のイナウが 5~60 本かたまって立っている。これをアペヌサ 〈ape-nusa=火の・木幣柵〉といい、ここにはアペフチ 〈ape-hudi=火の・媼(神)〉がいつも休息をとる場所で、女はもちろんのこと子供すら近よることができない。

アペフチノミのときには、アペヌサの下手からシソ 〈si-so=本当の・座=横座〉側の炉ぶちのほぼ中央にそって 5 本のアペシユト・イナウ 〈ape-sutu-inaw=火神への・棒一幣〉を立てる。アペシユト・イナウには適当な間隔を置く。アペシユト・イナウの頂にはシラリを 1 つまみずつ乗せてある。アペシユト・イナウの形はイナウの 3 分の 2 の皮をむき、中ほどより若干下手から、削りかけ 2~3 枚を左右 1 対にし、それを 2 段作る。その上の方はまわり全体をケ 〈ke=削る〉して菊の花のように作り、細くなったシンを折る。根本の方は炉ぶちのそばへまっすぐたてるために皮ごと削って尖らかす。

シソに座っている酋長だけが部落を代表して祖靈祭をとり行いそれに伴う加護・祖靈に対する

る伝言・酒神への謝辞などのアペフチノミをする。アペフチノミが終わると最もアペヌサ寄りのアペシュト・イナウを除き、残り4本のアペシュト・イナウの根本の焚火側に燠をうまく寄せせる。やがてアペシュト・イナウの根本が燃え自然と焚火側へアペシュト・イナウが倒れてしまう。そうすると火ばしで焚火へアペシュト・イナウを押しやる。その後で残ったアペシュト・イナウをアペヌサへ立て直してアペフチノミが全て終わる。[藤村ほか 1974: 47-48]

5本立てられるアペシュト・イナウの内、4本は祈願の後で燃やしてしまい、残された1本が炉の隅にたまっていくという。ここにはアペフチイナウしか表れてこないが、ピンネシュトイナウ・マハネシュトイナウと言うものについて説明した個所がある。

《15》美幌 K・Y 氏(女性)の事例 (1971.8.11)

アペシュト・イナウ〈ape-sutu-inaw=火の(神への)-棒-幣〉はピンネシュト・イナウ〈pinne-sutu-inaw=男性の-棒-幣〉マハネシュト・イナウ〈maxne-sutu-inaw=女性の-棒-幣〉とは全く別のものである。しかし、ピンネシュト・イナウやマハネシュト・イナウはふだんアペフチノミ〈ape-huci-nomi=火の-嫗(神)へ-祈る〉のときに使われるものである。[藤村ほか 1974: 54-55]

《14》《15》をまとめると、美幌では通常の火神の儀礼には男女の短幣を用い、ある程度大きな儀礼の際は特殊な短幣が加えられる。この時、特殊なものは主幣として扱われ、日常用いるものは副幣となる。《13》に述べられている5本の短幣の内訳は、主幣が1本、副幣が男女2本ずつで計4本であると考えられる。

《16》屈斜路 Y・T 氏(男性)の事例 (1951.8.31)

apeshutinau

このイナウの頭部に小さい machineshutinau 3本、 pinneshutinau 3本をつける。小さい6本のイナウは、 kamuinomi が始まると、炉に入れて燃してしまう。残った apeshutinau は炉縁に立てておく。[青柳 1982: 129]

図によると男性の短幣の削りかけは2箇所2段で↓に削り、女性の短幣は2箇所4段で下2段だけ↑に削っている。apeshutinauは図示されていない。文の前半の意味は良くわからないが、全部で7本の短幣を用いるとある。小さい6本の短幣を燃やし、残った1本は炉縁に立てておく。

《17》厚岸 M・H 氏(女性)の事例 (1931.6.14)

kamuinomi をする前に、 shutinau を2本作ってアベカムイにあげる。酒をつくる時も同様である。それが炉の脇に太い束になって積る。和人がこれを焚付けとまちがえて火にくべ、チャランケされたことがある。[青柳 1982: 125]

上記の諸例から北海道東北部の火神の祭壇に見られる特徴を次のようにまとめることができる。

火神に捧げるのは短幣であり、男女のペアで用いる。性別は削りかけの方向で表現し、↓が男性、↑が女性であることが多いが、白糠だけは逆になっている。また、十勝ではこうした表現の違いが見られない。ある程度大きな儀礼の際にはやや大きめか、少し形状の異なる短幣が1本加えられる。この大きな短幣は男性であることが多い。樺太の例に当てはめていうと、日常用いているものが副幣、特別なものが主幣にあたると考えられる。短幣の数は主・副を含め3~6本と幅がある。副幣は儀礼の終盤に燃やしてしまい、主幣は炉の隅に残される。

3-2. 北海道西南部(胆振・日高)

《1》千歳鳥柵舞 O·K 氏(男性)の事例 (1951.6.12)

sake をつくった時

hucikamui に kikechinoeinau 1本[長撫幣], chihorokakep[短幣]4~5本 chihorokakep には apesam[?]にあげる sirari[酒粕]をのせる。[青柳 1982: 146]

hucikamuy とは火神の呼称の1つである。長撫幣1本と短幣4本は全て火神に捧げるとされている。

《2》千歳鳥柵舞 I·S 氏(男性)の事例

他に, abekamui 5本, 戸口の神 2本, chisekorkamui 1本を作るが, abekamui にあげるものは焼いてしまう。また, chisekorkamui には kikechinoeinau[長撫幣] 1本をあげるが, 熊祭の前日, chisekorkamui に熊祭の許しを得, 当日には取去る。[青柳 1982: 71]

短幣を5本作って火神に捧げ、それらは焼いてしまうと。また、ここでも長幣を立てているが、家の神に捧げたものとして説明している。

《3》静内農屋 W·W 氏(男性)の事例 (1952.10.27)

[図示された長撫幣についての説明] 3.kamuinomi のとき, apeoi(炉) の右奥隅に立てたイナウ。Punkan でつくる。[中略]

apeetoknusa に shutinau[短幣]を立てるが、普通は1本が2本、大きな祭りには3本立てる。

[青柳 1982: 153-154]

炉の上座寄りに長撫幣と短幣を立てるとし、儀礼の規模により短幣の数が異なるとしている。長撫幣を何の神に捧げるのかは不明。Punkan は punkaw「ハンドイ」のことと思われる。

《4》二風谷 N·K 氏(男性)の熊送り 本祭 1日目 (全4日間中2日目)

この莫産の重ね方はその家の流儀によって違うが、多くは無紋の方を上に重ねる。この無紋のところに火の神に捧げるチセコロイナウ[長撫幣]を一本たてる。また炉の中には縁に添って4本のチエホロカケッパイナウ[短幣]を並べたて、戸の両側にもこれを一本ずつたてる。この炉の中にたてたチエホロカケッパイナウは儀式の進行につれて一本ずつ炉にくべて焼くのである。

るが、火の神へ捧げるチセコロイナウだけは焼かずに、あとでソパ（北東隅）寄りの天井に挿しておくのである。従って、このイナウの数はその家の酒造りの回数を示すことになる。【伊福部 1969：42-43】

この4本の短幣はこの日の儀礼の中盤、終盤に2本ずつ燃やされる。長幣は屋内の儀礼が一通りおわったあと、酒を入れている行器に立てかけられる。その後饗宴のために1本短幣が立てられ、終りにこれも燃やす。これで1日の終りには、炉に木幣は残らないことになる。なお、本数は不明だが第1日目にも短幣が立てられる。3日目、4日目には短幣が1本だけ立てられ、やはり全ての儀礼が終わった後に燃やされる。長幣を上座の天井に挿すタイミングは書かれていながら、3日目以降の説明に見られないでの、2日目の終盤であろう。

名取によれば隣村の平取に在住した H·k 氏(男性)の熊送りでも1~4日目まで火神に対してほとんど同様の祭壇を作る【名取 1941】。また、短幣を燃やす際に「この木幣を火の神に捧げます」という祈り詞を唱える【名取 1941：85】。

《5》長万部での捕鯨前の祈り

炉にアベウチカムイイナウ【型式は不明】、即ち火の神に捧げるイナウを立て、これから何々の漁に出ますから、無事で漁が出来ます様にと祈る。それから、アベウチカムイの、イナウの1本を、家の中の床の間に相当する所の、向かって右に立て、家の神であるケンルソバカムイに、同様に酒を捧げて祈る。【名取 1941：148】

ここでは木幣の型式については触れられていないが、炉に複数の木幣が立てられていることがわかる。また、火神への祈願の後、火神に捧げた木幣の1本をもって家の神を祭るとしている点が興味深い。西南部では、日常の儀礼に短幣を用い、大きな儀礼には短幣と長撫幣を用いる。この場合、短幣が副幣、長撫幣が主幣にあたると思われる。短幣には東北部のようにはっきりした性別はない²⁰。短幣は儀礼の節目ごとに燃やし、長撫幣は上座の梁の上に挿す。これは東北部の主幣と同じく、儀礼の終了後も屋内に保存され、長年の間に上座の梁の上には長幣が多数並ぶことになる。また、長撫幣は火神ではなく家の神²¹に捧げたものとして説明されることもあり、アイヌ語名称も apesamuspe 「火の側についているもの」、cisekorinaw 「家を持つ木幣」、sakeinaw 「酒・木幣」など様々である。近年刊行された資料では、例えば二風谷の萱野茂氏はこの長撫幣を siromainaw 「立派な木幣」と呼び、短幣とともに火神に捧げるものとしている【萱野 1985：110】。また、これを用いる儀礼は新築祝い、熊送り、結婚式の3つぐらいだと述べている。静内の葛野辰次郎氏は iresuhuciinaw 「火神の木幣」と呼び火神に捧げた後、家の神に捧げると説明している²²。しかし、このようなはっきりした説明が

²⁰ 1例だけ炉に立てた短幣を男性とする記述がある【田村 1998：231】。また、昭和初期に二風谷で作られた一対の短幣は一方だけに樹皮を残している【アイヌ民族文化研究センター 2001：132】。これが性別の表示なのかどうかは今後検討したい。

²¹ 家屋そのものに宿っている神であり、家の守護神とは別の神である。

²² 【アイヌ無形文化伝承保存会 1993：149-153】。

ないことも多く、事例《1》《2》のように同じ地域内でも意識が異なる場合もある。副幣の数や、主幣が副幣よりも大きく、儀礼の終了後も残されるという点は東北部と共通している。

3-3. 北海道中央部

この地方はまだ筆者の資料調査が不充分であり、本稿では空知の例だけを取り上げる。

《1》空知 S・S 氏(男性)の熊送りの事例 (1932.8.2)

屋内のアベウチノミの時は一、アベサムウシペ(火の神—キケチノエ一本即ちチセイナウ、ポンシュトイナウ二本)二、ミンダラウシ(庭の神、シュトイナウ二本)三、チセコロカムイ(キケチノエイナウ一本) [後略] [名取 1941: 60]

火神に長撫幣1本と短幣2本を捧げる。火神に捧げる長撫幣の別名を *ciseinaw* 「家の木幣」としているが、*cisekorkamuy* 「家の神」に捧げる長撫幣はこれと別に挙げられている。

以上見てきたように、複数の木幣からなる祭壇は北海道各地に確認できる。日常的な儀礼には短幣を用い、大きな儀礼の際はそれに加えて大きな、或いは複雑な型式の木幣が立てられる。日常と同じ形のものは祈願の後燃やしてしまい、特殊なものは儀礼の終了後も屋内に置かれる。

炉に立てた短幣を燃やすという行為は権太の記録の中にも散見する。例えば葛西は安産を占うために古くなった木幣に火をつけ、燃え方で占う方法を記している[葛西 1975a: 21]。ピウスツキが記録した東海岸オタサン(小田寒)の熊送りでは、二風谷の事例のように儀礼の節目で木幣を燃やしながら祈り詞を述べる様子が描かれている[和田 1999: 17、33]。これは名取が述べるように火神に木幣を捧げる行為である。儀礼の節目に燃やすということは、その間の儀礼が滞りなく進むよう見守る役目が火神に課されており、それを終えた事への返礼の意味がある。それまでは神前に立ててあったに過ぎないが、これを燃やすことによって本当に神の手元へ届けるということであろう。権太や北海道西南部では日常の儀礼で立てた短幣を、燃やさずにそのまま立てておくことがあるが、この場合火神が依頼されているのは次の儀礼までの期間の守護であり、これが火神に捧げられるのは次の儀礼を行う時点だと考えれば説明がつくだろうか。

これらの木幣について、取り立てて主・副の関係にあると述べた記録はない。が、主・副構造を持つ西南部の屋外の祭壇や権太の火神の祭壇とよく似た構成が見られることから、北海道の火神の祭壇も同じ構造を持っていると見なしてよいと思う。また、西南部から中央部では火神の主幣を家神と関連付けた説明がなされることがある。

4. おわりに

権太と北海道の事例の比較から、火神の祭壇がかなり普遍的な構造をもっていることがわかった。主幣を用いるような大きな儀礼では、祈願の内容も重要なものとなる。それに応じて主幣も平素に比べ大きく複雑なものになり、なおかつ炉に立てられる程度にコンパクトなものであることが求められる。それを満たすために作り出されたのが権太のミニチュア的な主幣がだったのではないか。

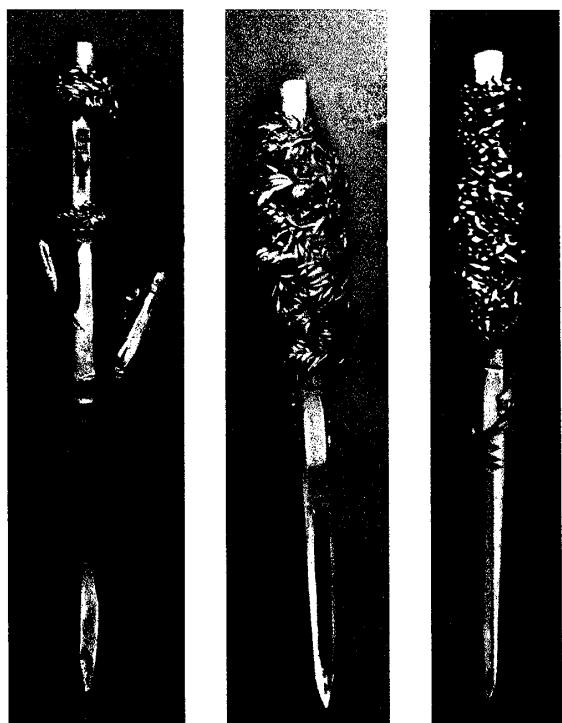


図1 白浜 a
北*34632
L28 W1.4
b
北 34633
L28.4 W2
c
北 34634
L29.3 W1.4

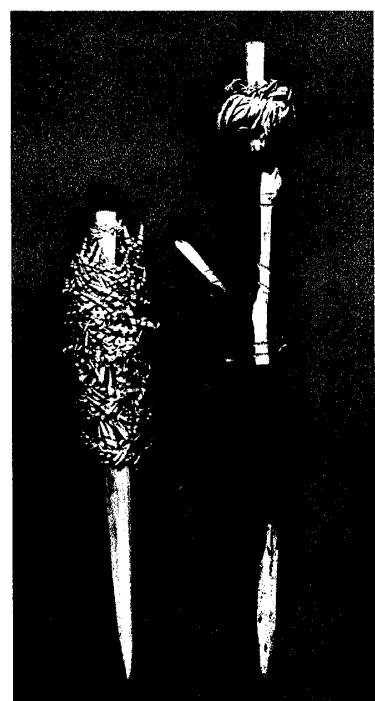


図2 多蘭泊 a
北 34629
L29.5 W1.63
b
北 34630
L39.5 W1.95

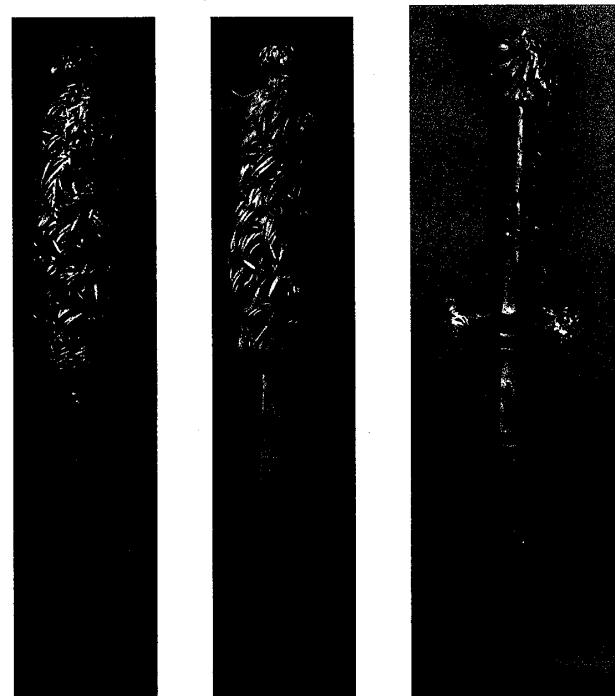


図3 新間 a
北 34636
L37.5 W1.5
b
北 34637
L37.5 W1.52
c
北 34638
L39 W1.95



図4 新間 d
北 34643
L34.5W1.35

* 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション植物園（前：農学部博物館）



図5 白浜 1948年撮影 [Арутюнов1998]より
この時期は炉の上にストーブを置き、ストーブの煙を炉の灰の上に出して煮炊きするというスタイルが多かった。



図6 対雁
北 10802
L83.5 W2.17

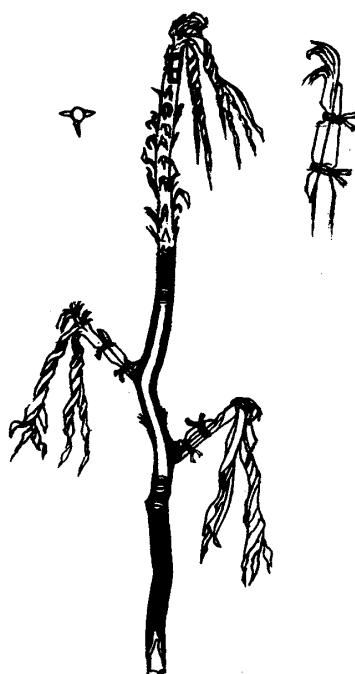


図7 地域不詳
サハリン州郷土博物館 101-4a
L30.5 W0.9

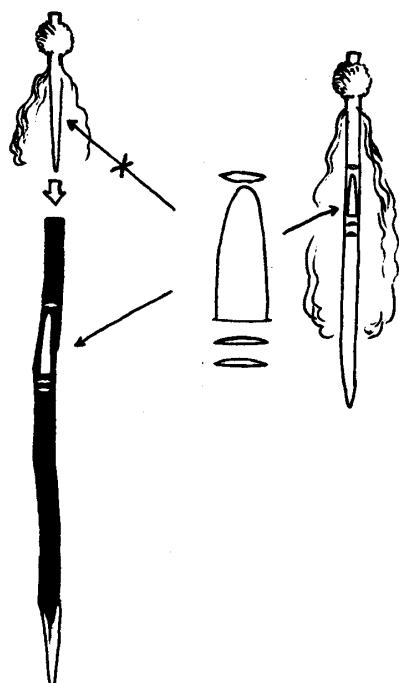


図8 胸部刻印（概念図）



図9 地域不詳
MAE 829-448
L35.5cm W2.3cm

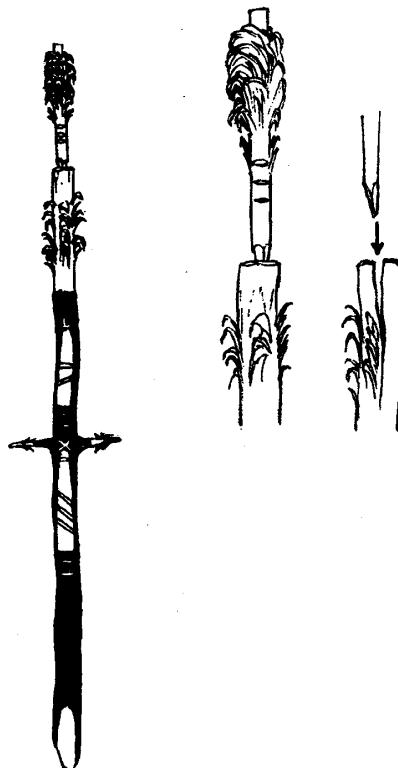


図10 地域不詳
MAE 829-455ab
L74.4cm W3.2cm

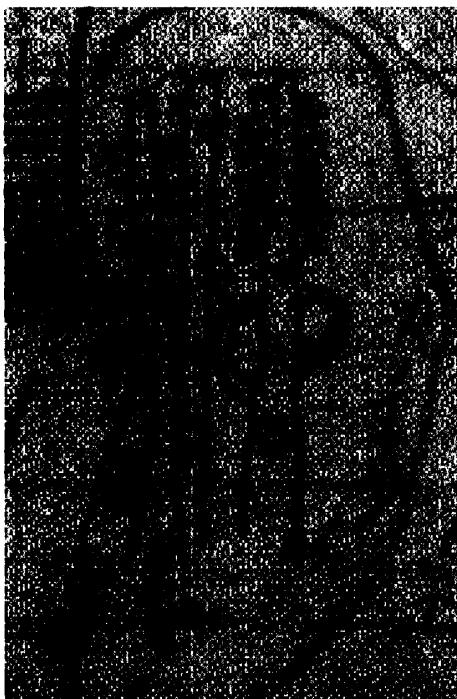


図11 東海岸 [小西 2000 : 28]より
「火ノイナウ」 左から「ハンノキ」
「ヤナギ」「松」と読める。

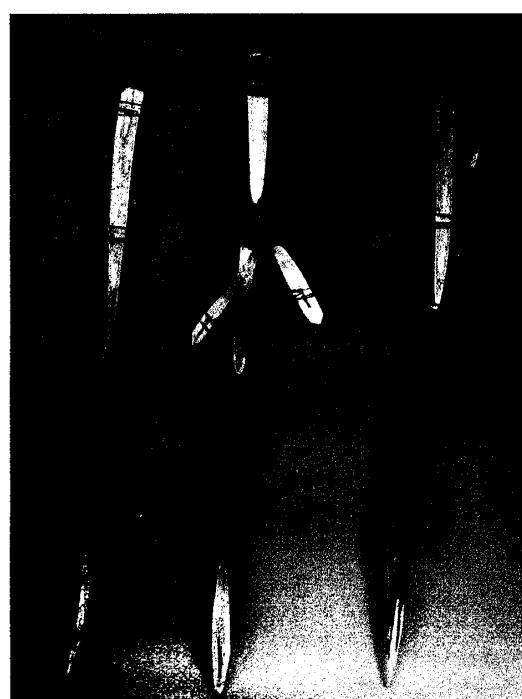


図12 新問 e f g
北 45288 北 34641 北 34642
L33 W1.37 L35.5 W1.86 L32.5 W1.16

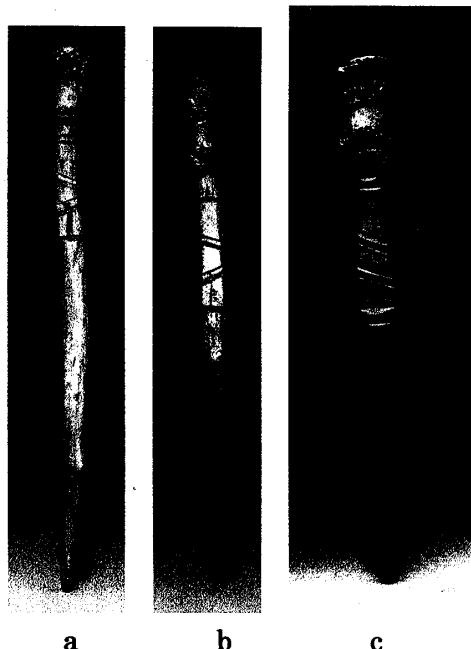


図 13 常呂（←鶴城）

記*89502-1 記 89502-2 記 89503
L28.6 W1.6 L27.3 W1.53 L28 W2.85

* 北海道開拓記念館

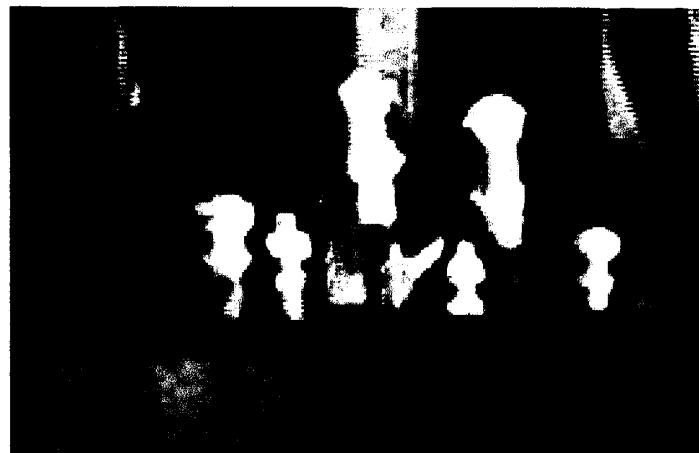


図 14 NHK『北方民族の楽器』1965 より
巫術の場面に映っている祭壇（拡大）



図 15 伏古 H·T 氏 [犬飼・名取 1939]

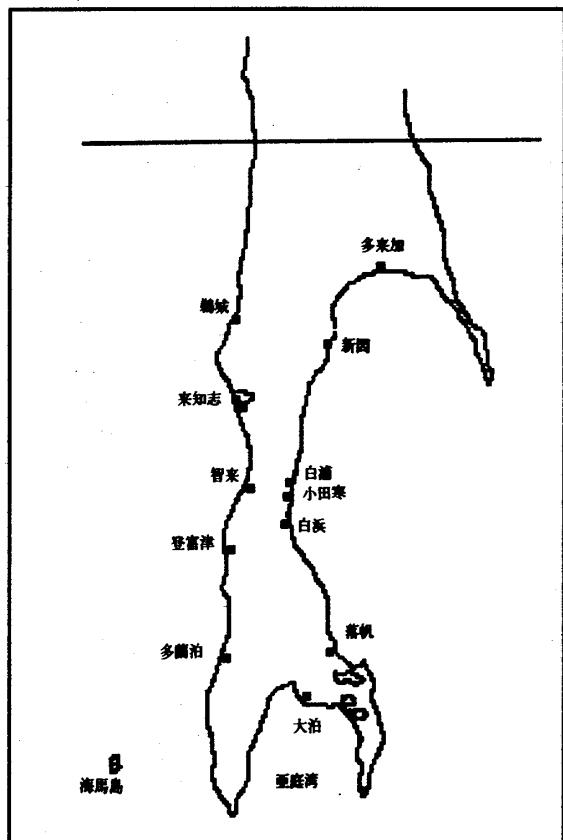


図 16 南樺太関連地名分布図

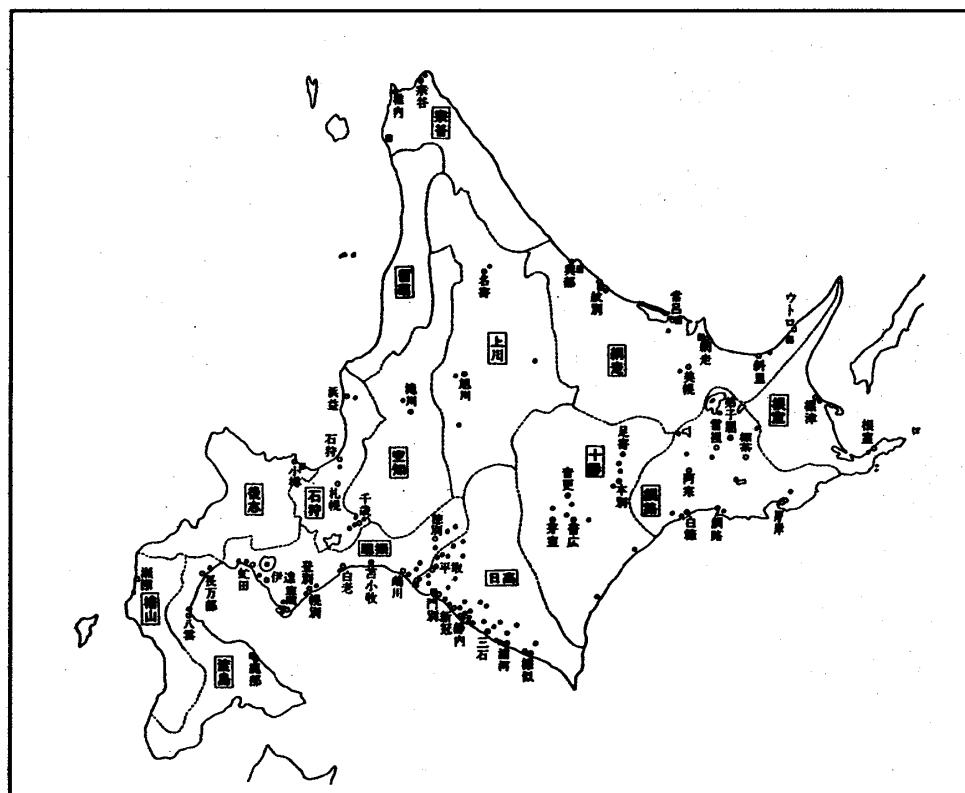


図 17 北海道関連地名分布図 [更科 1968]をもとに一部変更

参考文献

アイヌ民族博物館

1998 『公開シンポジウム アイヌのすまいチセを考える』。

2000 『伝承事業報告書 ポロチセの建築儀礼』。

アイヌ民族文化研究センター

2001 『資料目録5 久保寺逸彦文庫 文書資料・写真資料目録』。

青柳信克 編

1982 『河野広道ノート 民族誌篇1—イオマンテ・イナウ篇—』 北海道出版企画センター。

池上良正ほか編

1998 『日本民俗宗教辞典』 東京堂出版。

犬飼哲夫・名取武光

1939 「イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(一)」

『北方文化研究報告』2 北海道大学。

1940 「イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(二)」

『北方文化研究報告』3 北海道大学。

内田祐一

1989 「帯広・伏古におけるチセと付属施設について」

『アイヌ民族博物館研究報告第2号』 アイヌ民族博物館。

SPb-アイヌプロジェクト調査団

1998 『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』 草風館。

大貫恵美子(OHNUKI-Tierney,Emiko)

1979 「南樺太北西海岸のアイヌの生活」

知里眞志保・山本祐弘・大貫恵美子 『樺太自然民族の生活』 相模書房。

1984(1974) *The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin.*

Waveland Press, Inc.

小野寺克巳編

1990 『原野彷徨 更科源藏書誌』 サッポロ堂書店。

葛西猛千代

1975a(1943) 『樺太アイヌの民俗』 みやま書房。(菊池編 1997に再録)

1975b(1928) 『樺太土人研究資料』 私家版(謄写)。

萱野茂

1985 「アイヌの神と自然」『イヨマンテ 上川地方の熊送りの記録』 小学館。

金田一京助・杉山寿栄男

1942 『アイヌ芸術 木工篇』第一青年社。

久保寺逸彦

1953a 「北海道日高国二風谷コタンに於ける家系と paseonkami 「尊貴神礼拝」」

『金田一京助博士古希記念 言語・民俗論叢』 三省堂。

1953b 「アイヌ族の祖靈祭祀—Shinurappa の宗教的儀礼に就いて」

『日本人類学会日本民族学協会連合大会第六回紀事』

日本人類学会日本民族学協会連合大会事務所。

1971 「沙流アイヌのイナウに就いて」『金田一博士米寿記念論集』 三省堂。

河野広道

1971 『北方文化論 河野広道著作集 I』 北海道出版企画センター

小西雅徳

2000 (編集) 『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』(特別展図録)

板橋区立郷土博物館。

佐藤直太郎

1958 『釧路市立図書館叢書第 4 篇 釧路アイヌのイオマンデ』市立釧路図書館編。

1961(1959) 「釧路アイヌの菱の実祭り」『佐藤直太郎郷土研究論文集』釧路市。

更科源藏

1953 「コタン探訪帳 8」 弟子屈町立図書館所蔵。

1956~59 「コタン探訪帳 11」 弟子屈町立図書館所蔵。

1962 「コタン探訪帳 17」 弟子屈町立図書館所蔵。

1962~64 「コタン探訪帳 18」 弟子屈町立図書館所蔵。

1968 『歴史と民俗 アイヌ』社会思想社。

田村すず子

1998 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。

知里眞志保

1951 「知里眞志保遺稿ノート」 No.214 北海道立図書館所蔵。

名取武光

1940 「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』3 北海道大学。

1941 「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』4 北海道大学。

1959 「樺太千島アイヌのイナウとイトクバ」『北方文化研究報告』14 北海道大学。

Б.А.Жеребцоб

1988 Материалы иццледбайнй Б.А.Жеребцоба по этнографии айноб Южного
Сахалина Н.Арутюнов .ed

藤村久和・平川善祥・山田悟郎

1973 『民族調査報告書 資料編Ⅰ』 北海道開拓記念館。

1974 『民族調査報告書 資料編Ⅲ』 北海道開拓記念館。

北海道開拓記念館

1990 『更科源藏資料目録』 北海道開拓記念館一括資料目録 第22集。

北海道教育委員会

1993 『アイヌのくらしと言葉3』 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ6

山本祐弘

1943 『樺太アイヌの住居』 相模書房。

1970 『樺太アイヌ・住居と民具』 相模書房。

和田完（編著）

1999 『サハリン・アイヌの熊祭 ピウスツキの論文を中心に』 第一書房。

（きたはら じろうた・千葉大学大学院文学研究科）